



「あんなア、ツグミ、最近スガくんと、どうなつとん？」
「どうって、どうもないよ」

あたりはもう茜く染まり始めていて、見上げた校舎の時計は5時の10分前を指していた。

遅くなってしまった。お喋りが弾んでしまった。下校時間の鐘に、気がつけば教室に残っていたのはツグミとマチと、仲のよい友だちがなんんか。話の途切れたところを見計らって、我に還ったように、まばらに帰っていった。

「なんもないン？」
「相変わらず、よ」

どこの教室も、もう空っぽになっていて、灯りも消え、薄暗い廊下は、端から端まで足音が響いて届くようだった。半ば閉じられていた校門の前も、ふたりの

他に誰もいない。

「ふうん……」

「うん……」

柵に掴まり、屈んで靴下を伸ばす、つま先で地面を2・3度蹴る、ふたり並んで歩きだした。校舎の時計の針は、いかにも時を刻んでいるよと云うように、ふたりの背中から厳格な音をたてる。その低い響きに思わずたじろぎ、意味もなく腕時計を確かめてしまった。

「昨日ナ、スガくんに会ったンよ」

「どこで？」

通学路は一本道で、ゆるい坂が続き、見上げたところに駅がある。駅といっても主要線からはずれた駅で、路線も上下一本ずつの小さいものだが、学校と線路を挟んで反対側に、江戸時代から続いている大きなお寺が建っていて、どうもちよつとした観光地に取り上げ

られているらしい。その所為もあってか、駅前あたりはこぞって土産屋が軒を連ねている。

「うん……放課後にナ、駅、フォームで一緒になって。ひとつ前の駅まで一緒だった」

「ふうん……」

ツグミが前を歩く、次の電車まで、ちよつと早歩き。教室では他愛もないテレビ番組の話題、間に合えば再放送がみれるんじゃないかな、なんて話していた。だから少し急いでるふうに、早足、マチの前をいく。

少し傾いたとはいえ、まだまだ背中を射す陽が暑く、歩みを早めれば、汗が背中を流れだす。

「なんか云つとつた？」

「うーん……」

さりげなく前をいく、こんな話をしていると、足は勢いのまにまに流しても、頭の中ではどうしても想像

して仕舞う。首の後ろのあたりからもくもく拡がり、頭の中を独占して、仕方ない。憧れはよくみえるもの、あまつさえ、浮かんだ顔がこちらにほほえみかけてきたりなんてして、思わず顔がほころんでしまう。気づいてはいるが、どうにも我慢できない、こんな顔、悟られたくない。できるだけ低い声を繕って、後頭部で応える。

坂を登るに連れ、だんだんと開けてくる空に、陽の色に染まりだした看板が並んでみえる。道の脇には団子屋が連なり、これも街の特産品にされているらしい。観光客でもないのに、ありがたみも珍しさもないけれど、おいしいことは確か。なにより、放課後は一番おなが空く時間。甘いあんこの匂いが坂道をつつみこんで、刺激する。だから、つつい匂いに誘われて、休んでいく生徒の姿も多い。ふたりもよくここで立ち止まり、団子をひとつ、そしてお喋り、そんなことも屢々しばしばつつい小遣いを遣って仕舞っては「また待ち伏せされてたナ」なんて、笑いあった。

でも、今日は遅れたくない。

「楽しかったよ」

咄嗟に振りかえった。瞬間、目があって、思わずツグミの方が驚いてしまった。

マチはまっすぐ見詰めかえす。なにが云いたいのかわからない。落ち着いてみえるのは、ツグミの方がやきもきしている所為か。それにしても、その顔がほんとうに「楽しかった」とか云いたいふうでもなく、なんだか不可解な顔。

たまらず乱暴に振り向き、また先行する。

「……スガくんナ、あたしの好きなバンド、CD持ってるって、今度持ってきてくれるって、ゆうねン」

「へエ……」

カラスの声が頭の上から響く。夕焼けにカラスは似合う、と思う。

ツグミの時計は3分くらい遅れていて、マチの時計

は5分早めである。ふたりともきっかりした時間は判らない。60秒くらいは想像で補っている。でも今は曖昧さが怖い。たった1分の誤差で電車はいつて仕舞う。

「……スガくんナ、卒業したら西町の専門学校いくんだって」

「へエ……」

少しつま先に力をいれた。余裕はそんなにない筈。電車に間に合うには、想像するに、改札を駆け込むことになるかも。振り返れば、まだ校舎の時計もみえるかもしれない。雑な足音を、パタパタ、道に響かせていく。

「……スガくんナ、あたし、来週誕生日ヤン？ 憶えててくれたらしくて、『なんか欲しいモンある？』って、訊いてきたンよ」

「へエ……」

だいぶ坂を登り、太陽に近くなった。とはいえ、これくらいの上と下とで気温がそう変わる訳もないだろう。だけど背中には汗。衣替えしたての冬服に似合わない、滲んでいる。

「あんなア」

「なに？」

息が熱くなりだしているのが判る。少し脚も張ってきた。開けてきた景色の所為で、沈みかけた太陽が、尚茜く背中を照らしている。

「あたし、スガくん、スキかも知れん」

つまずきかけた。

なにもないところで。

足は持ち直した。でも、取り繕えない。

口端がむずむず歪む。なんて応えたらいいんだろう。

狭い道に珍しく、トラックが3台、脇を掠めていった。

「……うらぎりもん」

「……えエ？ なに？」

傷ついた。

また速度を速める。土産屋街にはいる。さらに速度を上げる。たち籠めた甘い匂いを割くように。

「……不潔」

「なに？ 聞こえん」

汽笛。やっぱり見誤っていた。樂觀過ぎ。線路の向こうから電車がくる音がする。

「だから、なにー？」

「……ドロボウ猫や」

間違い。自分でも判っている。もともとツグミのも

のじゃないもの。

太陽は思ったより早く沈む。あたりは凡そ茜く。影は長く延びる。もう汗も拭わない。なりふり構わず、脚をあげる。

「……あたし、エエかな？」

「……無理」

スニーカーの紐が、地面にパチパチ鳴る。あからさまに荒げた足音は、ちよつと乱暴だとも思う。

「……エエかな？」

「無理！」

最早歩いているのか。殆ど駆け足。息が切れはじめた。声は、半ば詰まったように、

「スキんなくて、エエかな？」

「あんたにや、絶対無理！」

僅かに一拍。立ち留まったのが判った。そして、また足音が属つく。——怒った？

電車は遂に徐行。ブレーキが錆びて、軋つんぎむ。劈つんぎく。

「……せやかて、あたしの方がカワイイし」

「……前髪、そろってないのに？」

影とおなじに、身体が大きくなれ。足も長く伸びて、早く着く。

「あたしの方が、背が高い」

「その分、体重い」

逃げるように早足。追うように早足。

「あたし、脚、太くない！」

「だまれ！」

校舎から5時の鐘。

「だまれ」

「だまれ」

「だまれ」

「そっちが、だまれ」

「そっちこそ、だまれ」

「だまれ、だまれ」

「だまれ」

「だまれ」

「だまれーー」

ふたりの背中で扉が閉じた。「走るな」、窓越しから、
駅員さんが不機嫌そうに睨んでいた。

顔を見合わせた。一息、

「やっぱり、スガくんのことなんて、どうでもエエ

……」

「そやネ……」

暮れ(仮)

非売品

2011年10月31日 第1刷印刷

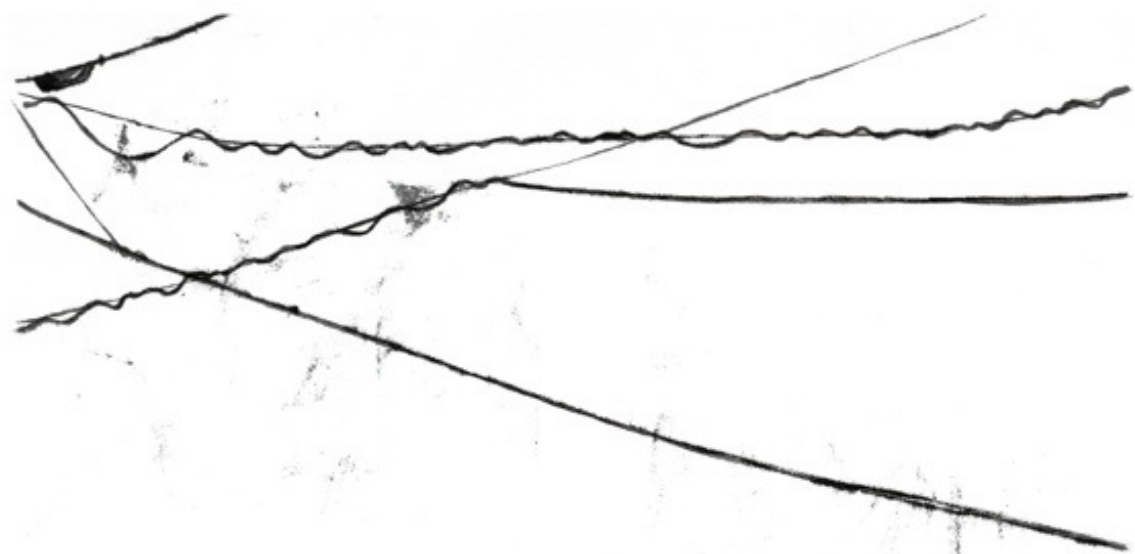
2011年11月1日 第1刷発行



所 版
有 権

著 者 いかるがつみき
造 本 知古つとむ
発 行 知古文庫

印刷・知古文庫 製本・知古文庫



© Tsumiki Ikaruga 2011

<http://ameblo.jp/tarareba-world/>

Illustrations copyright © Chico Tsutomu 2011